

春から夏へ

倉橋惣三

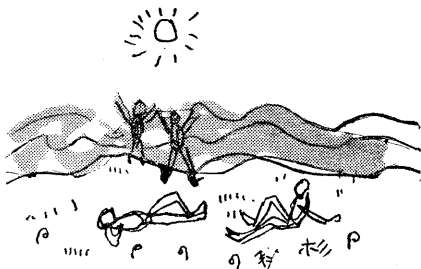
温

温の一字、保育の意義を盡すといふも過言であるまい。

凝ったものを解き、閉ぢたものを開き、縮んだものを伸ばし、萎びたものを張り、一切の生命を進展させる。

見よ、今、この普き温の力を。万物、そこに笑ひ、こゝに躍り、自らの力を楽しむ。

温は下から湧き、上から漲る、皆自然である。野に園に溢るゝ自然である。つくりもの、こしらへものゝ温は、その真の力を持たない。温室の温は、到底自然の温ではない。



温の人、保育者。春は正に、あなたの、やさしくて強いはたらきを其のまに示してゐる。

三月

芽が出てゐましたと告げに来る子がある。花を見つけたといつて飛んで来る子がある。つれられて行つて見ると、その芽は低い雑木の枝の端の小さい緑粒であり、その花は草の葉がくれの名もない蕾である。

「まだ、こんな小さいの……」

またしても、こんなことをいふのがおとなだ。「まだ……」それは将来をのみ待つて今を見落す心、将来にのみ重きを置いて今を軽んずる心の、あさはかにも、すげない、つぶやきの声である。春を四月の爛熟にのみ求めて、そのために却つて、芽と蕾の今の春を「まだ……」としか受けとり得ない、こちたくも、慾ふかな、おとなの心である。

三月の春は早く子どもらに来る。一歩々々近づきくる小さい春を、その時に一ぱいに享け、一ぱいに楽しんでゆく子どもらに。

四月

津 守 真

ここに掲載した文章は、倉橋惣三の「育ての心」より選んだものである。春から夏にかけての幼稚園の随想である。

「育ての心」は、その生涯を幼児教育に捧げ、公生活の大部分を東京女高師の附属幼稚園で過した倉橋惣三の代表的な著作の一つである。その一篇、一篇の中に動いている幼児教育に対する洞察と、読者の感情に触れずにいない詩的な表現とは、その当時の幼児教育者を魅了したのみでなく、現代の読者にも何か温かい洞察を感じさせてくれる。

現代の幼児教育は、この書物が出版された当時から比べると、ずっと進歩したかのように人は言う。たしかに幼稚園は

花が咲いてゐる。どんなに花自ら嬉しいであらう。花が満開してゐる。どんなに花自ら楽しいであらう。その、花自らの喜びを喜びとし、その幸福を祝ふ心、それが四月のまごころである。たゞ、こっちの興味で、美しと眺め、美しと賞するのみではない。

見よ、子どもらの生活が咲いてゐる。満開してゐる。かれら自らに、どんなに快いことであらう。どんなに喜ばしいことであらう。その、子どもらの幸福を、子どもら自らの心に和して祝ふ心、それがわれらのまごころである。

しかも、またしても、花を賞美するだけで、花そのものになって喜んでやらない如く、またしても、教育のためから眺めたりするだけで、子どもら自らの心になって喜んでやることを忘れる。

五月

なんといふすばらしい生育の力であらう。田に畑に、野に庭に、むくくと萌え出る若芽の、伸びて伸びて伸びてゆく勢は、日に日に目を驚かすのである。

しかも、それに劣らないのは、子どもらの活力の伸長である。毎日その中

普及したし、知識も増している。しかし、おとなが幼児を見る眼、幼児の心情の理解はそれだけ進んだであらうか。

近年、児童相談所に相談にくる幼児の母親は非常に多い。これは、相談所が社会一般に気軽に利用されるほどに普及したことを示すもので、一般的には良い傾向である。他面、そこで発見される数多くの子どもが、親が教育に熱心すぎ、子どもに対する要求が高すぎるために、いろいろの問題を起していることは興味深い事実である。そしてそのような親の大部分が、高い教育をうけ、育児や児童心理に関する数多くの書をよみ、育児については何でも知っているのである。ところが、自分の子どもについては、知識が仇となって、子どもの気持を素直に理解し、子どもの現在の状況に適した環境を備えてやることができなくなっている。

に俱に居ながらも、日々に新らしい目をみはらせられることばかりである。

伸ばそうとするばかりでなく、伸びるのを待つてゐるばかりでなく、現に目の前に斯うまで伸びゆくのを驚く心。——それが五月の心であり、また教育の心でもある。

六月

外には雨が降りつゞけてゐる。部屋の内は笑ひ声で晴れわたつてゐる。窓硝子はぬれて曇つてゐるが、子ども達の顔はみんな明るく輝いてゐる。外からの光でなく、内からの光である。天の太陽は雲につゝまれる日があつても、こゝの小さい太陽達は、いつだって好天気だ。

その子どもらに、またしても鬱陶しそうな顔をして見せるのはおとなだ。なぜかう降るのかと、言つても仕方のないかこちごとを言つて、呟いて聞かせるのもおとなだ。——子どもは、知らなくてもいゝことを、おとなから教へられることが屢々ある。六月の雨だつて、おとなが教へなかつたら、子どもには少しも苦にならないものであらう。

る。

幼児に関する知識が進むと、幼児教育の分野はそれだけ進歩するのであるけれども、その知識が真の意味で実際に適用されるようによく考えなければならぬと思ふ。局部的な知識が全般を支配するかのようになると、あやまちを犯すことになる。どんなに子どもに関する知識があつても、そのときの子どもの要求していることは、保育者の知識ではなく、子どもの気持がよく理解してもらへることなのである。おとなの幼児に対する理解というものは、実際には、おとなと子どもとの間に通う温かい人間関係の中にでき上るのである。

現代の学問的知識からみると、倉橋惣三の幼児教育論は、詩的にすぎ、浪漫的にすぎるとみえるかもしれない。しかし、彼の主張する保育者の幼児に接する

日かげ

子どもには一ぱいの日なたと共に、静かな日かげも与へてやりたい。

夏の日が強くなると、木の葉が繁って涼しいかげをつくって呉れる。自然はなんといふこまやかな心づかひと、やさしいたはりに行き届いてゐることであらう。励ましと共にいたはりをお忘れぬ。引き立てると共に憩はせることをお忘れぬ。

日盛りの中を駆けまはって、その廣い明るい光線に、ぐんぐんと活気をあほり立てられてゐる子どもが、ふと、涼しい木かげに来て、にっこりと、なごやかな顔を見せることがある。

日なたがなければ子どもは生きない。しかしまた、日なたばかりでも子どもは生きられない。日なたに生き、日かげにかばはれて生きる子どもではある。

わたしたちも、子どものために、一ぱいの日なたとなると共に、よき日かげにもなつてやりたいものだ。

雑草

休暇あけの幼稚園の庭が、また雑草園になつてゐる。子どもを迎へるにも

態度というものは、現代の学問的知識に

照らしても妥当とされるものである。彼の論は、いわば、保育者の主観的立場を詩的表現をもつて敘述したものである。幼児教育は、どこの国においても、民主的教育の先駆をしてきたものであるが、日本においてもまた、幼児教育は、他の教育よりもずつと進んで民主的教育を主張してきた。倉橋惣三は、きわめて独自の形で、その先駆者としての役割を呈した。そして、現代において、彼の論じているところを、学問的に分析するならば、現代の学問的知識からも、彼の論の正しさを証明することのできる部分が多いであらう。

現代においてもなお、倉橋惣三の書物は、幼児教育の第一級の書物であり、保育を志すものが、一度は必ず読むべき書物であると思う。

何も格別の準備のない中で、こればかりは大した準備だ。

子どもを迎へる第一の用意は、どうして子ども達の心をらくにさせ得るかにある。準備々と心を入れ過ぎて、餘りに隅々キチンとしてゐると、子どもは一種の窮屈を免れないであらう。と言って餘りの亂雑不秩序は、子どものやはらかい心を面くらはせ、らくを通り越して混沌たらしめるであらう。要はその中庸である。建築内は、掃き清められ、拭ひ清められてゐなければならぬ。庭も、刈るべき芝と整ふべき枝には充分手が入れてなければならぬ。そうした上で、伸びるがまゝ、に伸びさせられ、茂るがまゝ、に茂らされてゐる雑草園こそ、教養の間に漏れ出てゐる天眞の素朴さのやうなものである。子ども達の心に、何より自然ならく、を与へずにはゐないであらう。

〈倉橋惣三の主な著作〉

幼稚園雑草 大正十五年 乾元社 (昭和二十三年再刊)

倉橋惣三の初期の論集である。

育ての心 昭和十一年 乾元社 (昭和二十二年再刊)

前者の続篇といふべきもので、幼稚園長としての倉

橋惣三の幼児教育論を集めたものである。

幼稚園保育真諦 昭和九年 東洋図書株式合資会社 (昭和二

十八年再刊、フレール館)

倉橋惣三の名著であり、まとまった幼児教育論とし

ては唯一のものである。彼の誘導保育論が展開されてゐる。

フレール 昭和十三年 岩波書店 (昭和二十六年再版)

フレールの紹介書としてもっともすぐれたものの一つである。

新教育の立場からのフレール批判をもよく示している。

子供讃歌 昭和二十九年 フレール館

倉橋惣三の最後の著作で、幼児教育者としての彼の自伝である。

